

■作家について

1969年、ソウル特別市に生まれる。1996年、東亜日報新春文芸に短編『불란서 안경원(仏蘭西眼鏡屋)』が当選し、登壇した。そして同年発表した長編『식빵 굽는 시간(食パンを焼く時間)』が第1回文学トンネ新人作家賞を受賞し、注目を浴びた。この小説の主人公はパンを焼く技術を習っている女性で、一生懸命作ったパンを家族や周りの人々にあげようとするが、母、彼氏、父、叔母が次々とそのパンを拒否し、結局周りから見捨てられ一人になる話である。

趙の作品は、生活の周りで起きるささやかなことの細かい描写が特徴である。そして、人物の間で起きる事件に対する叙述よりは、主人公の内面に描かれる外部世界の印象や観念、日常的な過程に対する鋭利なアプローチが印象的である。また、趙の小説には一番近い関係であるべきの家族から捨てられ孤独な人々がよく登場する。最近発表した『풍선을 샀어(風船を買った)』には、パニック障害、認知症、パーキンソン病を患う人物たちが登場する。しかし、血縁関係のない人々が類似家族の関係を通じて苦しみや疾病から回復していく可能性を描いているという点で希望的な面を見せている。

1969年、ソウル特別市に生まれる。1996年、第1回文学トンネ新人作家賞受賞。

2002年、今日の若い芸術家賞受賞。2003年、現代文学賞受賞。2008年、東仁文学賞受賞。

(ウィキペディアより)

■登場人物

미호・・・34歳。中国語の翻訳家。腹違いの妹がいる。

어머니・・・脳が委縮する病気で、記憶がなくなっている。以前は、礼儀正しく、清潔な母だった。

허고문・・・文化ビジネス財団の顧問。3種類の仕事をしているようだ。全ての肩書が顧問。

高所・閉所恐怖症。死への恐怖で夜眠れない。建築家らしい。

연변혈머니・・・夏にミホの家の半地下に入居する。

오실장・・・허고문의補佐役。常にスーツを着てサングラスをしている。

미스터 주・허고문의運転手。

■あらすじ

① (P171～P1723 18行目)

ミホの側に3人の老人がいる。一人は死に、一人は死期が近く、一人はミホと大して関係のない人。ある日、デイケアへ行った母を出迎えに外に行くと、小路に大きな黒い車がいた。オ室長と運転手の Mr. 주。ミホは二人を見て、허顧問が亡くなったことを悟った。そしてオ室長は、その老人がミホに残していったものを渡しに来たのだった。車のドアを開けるとそれは、悠然とミホを見上げた。

② (P173～P176 17行目)

ミホは、京畿道にある文化ビジネス財団で、先輩の代役で中国語での講演の代読を行った。講演後、ミホは依頼者の部屋に案内され、そこで司顧問と呼ばれる中肉中背で白髪の人に出会う。老人は、高所・閉所恐怖症で、自分が作った建物は3階建てしかないという。そして、笑い声の最後に甲高い女性のような音が混ざる特徴的な笑い方をした。

老人の執務室は、ガラス窓と数個の家具のあるがらんとした部屋だ。司顧問は、自力で帰るというミホを自分の車に乗せて、最寄りの駅まで送ることにした。老人は車中、早口で話していたが、トンネル通過時にはシートベルトを握りしめ極度に怖がっていた。

ミホは、家に着くと自分がいない間の母を、気まずい思いをしながらも CCTV の録画を確認した。その晩、数十匹の獐猛なドイツの狩猟犬に囲まれ、死ぬのが怖いと呟きながら甲高い声で笑っている老人の夢を見た。

③ (P176～P182 17行目)

老人から2回ほど中国語の翻訳を依頼された。今の母は、脳が委縮し以前の母の面影はなかい。療養院に一時入所していたが、母に乞われミホが家で面倒をみている。2年前に2階から1階に移り、ミホは母が退所してから仕事場の다락방に CCTV を取り付けた。初夏が過ぎたころ半地下の部屋に延辺のお婆さんが住み始め、鉄のパイプを表門の前に立て掛けた。

ミホは、死について考えることがあった。残される人のことなど。母は静かに死を迎えてほしいと願っている。ミホは、老人から午前0時から午前3時まで話し相手になる仕事を依頼される。その部屋には耳の聞こえない小ぶりのドイツ犬がいた。老人は、ミホの延辺婆さんとの話に興味を示す。

④ (P182～P184 2行目)

ミホと老人の夜の対話は2カ月間続いたが、突然終わりになった。ミホは老人との話を思い返した。なぜ、仕事を引き受けたのか、止めたとき何かを残してきたような気持ちになったのか。ミホは、母が老いていくのを見て、いずれは当然自分も一人で老いて行くが支えてくれる人がいないことを自覚した。老人の家で犬を見たとき、老人には犬しかいないと感じ、夏なのにうすら寒く感じた。ミホは、毎週金曜日に、Mr. 予の車で行き、深夜タクシーで帰っていた。CCTV に映る母は、微動だにせず眠っている。テープを巻き戻さなければ死人のように見えるときもあった。

⑤ (P184～P186)

延辺婆さんは、鉄パイプを表門の門柱にセメントで固定した。ミホの家の階段に洗濯用ロープを縛りつけた。ミホは視界が遮られる感じがした。ミホは、意気込んでロープを解き門柱の上に置いたが、次第に意気消沈していき、延辺婆さんが言い返してきたらと不安になっていった。10日間を過ぎた頃、ロープは門柱に巻かれ黒いビニールテープが被せられた。ミホは老

人にその話をした。ミホは延辺婆さんへの罪悪感を感じているが、老人に延辺婆さんは家主の気持ちがあはぐれるのを待っているのだからそっとしておくように言われる。そして、老人から、ミホが親指を反対の手のひらに押し付ける仕草をしていないと楽しげに言われる。老人の言うとおり、ある日ロープに秋冬の布団が干されていた。

⑥ (P187～P188 11行目)

ミホは、老人が変更を嫌うため、老人がいなくても老人の部屋で過ごした。犬が横にいるので一人でも困らなかった。犬が敏感に感じるのは、主人の動きで、この犬は自分の鳴き声が聞こえないだけで、それ以外は普通だった。ミホは犬と親しくなった。老人の部屋にいる時、たまに誰かがこっそりのぞいているような気がした。屋敷には雇用人がいるのに、全く匂いがしない。なのに、人でない、実体も影もない何かが、ミホと犬と、そこにはいない老人をじっと見つめているような感じがする時があった。死期の近い母と暮らすミホだから感じるのかも知れない。

⑦ (P188～P192 10行目)

入室長がミホに渡すために犬を連れてきのは、仕事を止めて2年過ぎた頃だった。おかしなことにそのときに話したことも、終わりになった理由も思い出せない。だが、老人から母が病気になる時大声で泣いたかと聞かれ、ないと答えたことがあった。老人は、親が死んで嬉しく思うかもしれないからかと言ひ、あの女の声交じりの声で笑った。その後、迎えが来なくなり、翻訳の仕事もなくなった。ある日、ミホは夕方のニュースで老人らしき人を見つけ、安堵に似た気分になった。また、あの時間を全て忘れていないと気づいた。犬のサインも忘れていなかった。

母は、娘のことも自分のことも分からなくなっていた。攻撃的になりデイケアから療養院に移った。週一回母を訪ねた。延辺婆さんのロープに自分も洗濯を干したくなったことなどを話した。母は、ぼーっとした目でミホを見ようとしていた。

財団は、レストランが入り、地域ギャラリーとしても利用されている。ミホは、老人は、準備して死んだのだと思えた。ミホは、老人から犬と前向きに生きることを教わったと思うようになった。母の死ばかり意識せず、母の生を期待することにした。ミホは、自ら志願して海外の翻訳家と3カ月過ごすプログラムに参加することにした。母が正常なら送り出してくれただろうと信じて。出発が近づいたある日、母はミホに向かって개、개、거、거と言った。犬なら延辺婆さんが可愛がってくれると答えた。

⑧ (P192～P193)

ミホは、滞在している海外の村を流れる川を眺めていた。今は落ち着いたが、この地に来てから泣き崩れたことがあった。あの日、母が行った言葉は、개、개は가、가。「母は大丈夫。行きなさい、ミホ。」だったことに気が付いた瞬間に。ミホは、하顧問に蓮の種の話をしたかった。

この種は、外皮が固くて水を吸収しそうもないのだが、湖に長期間浮かんでいるうちに傷ができたそこから水が浸透し発芽することを。延辺婆さんには、犬のことを。母には、ミホが出会った老人の共通点があることを。一人で遠くを見つめている姿は、ミホの目には祈っているようにみえることを。今、川の流れを見つめている私も同じかもしれないと。

■感想

母の介護を自分の責務と頑なにになっていた主人公が、老人との出会いによって自分を生かし、母も生かしていくという心の変化を描いた作品だと思う。

老人との仕事が、とても特殊なもので、なぜそこまで特殊なものでないと、この主人公が自分を変えるきっかけをえられなかったのかが、不思議である。

最後の、蓮の種はミホ自身であり、私たち自身でもあると感じた。